



# 追手門学院大学 ベンチャービジネス・レビュー

Otemon Gakuin University

追手門学院大学ベンチャービジネス研究所・茨木商工会議所商業部会 共同調査

## 2023年度 茨木フェスティバル

「茨木の交通と暮らし」アンケート結果分析

葉山 幹恭・宮崎 崇将・村上 喜郁





# 目 次

## 調査報告

追手門学院大学ベンチャービジネス研究所・茨木商工会議所商業部会 共同調査

2023年度 茨木フェスティバル

「茨木の交通と暮らし」アンケート結果分析

葉山 幹恭・宮崎 崇将・村上 喜郁 …… 1



# 調査報告書



追手門学院大学ベンチャービジネス研究所・茨木商工会議所商業部会 共同調査

## 2023年度 茨木フェスティバル 「茨木の交通と暮らし」アンケート結果分析

葉山 幹恭・宮崎 崇将・村上 喜郁  
追手門学院大学ベンチャービジネス研究所

### 目次

はじめに

アンケート当日の実施状況

1. 回答者の基本属性
2. 【質問1】あなたが普段よく利用する鉄道（モノレールを含む）の最寄り駅はどこですか？（複数回答可）
3. 【質問2】最寄り駅を利用する目的は何ですか？（複数回答可）
4. 【質問3】よく利用する駅周辺に不足していると思う施設・お店は何ですか？（複数回答可）
5. 【質問4】茨木市内での移動に利用・使用する交通手段を教えてください。（複数回答可）
6. 【質問5】今年の11月16日にオープンする「おにクル」をご存じですか？ご存じの場合は何で知りましたか？（複数回答可）
7. 【質問6】「おにクル」には以下のような施設や機能があります。利用したいと考えていますか。利用したい施設や機能を教えてください。（複数回答可）
8. 【質問7】「おにクル」の大ホール（1,200名収容）にどんなイベントを期待しますか？（複数回答可）
9. 【質問8】その他「茨木の交通と暮らし」についてご意見があればご記入ください。

おわりに

### はじめに

本アンケート調査は、茨木市の市民祭りである「茨木フェスティバル」における市民の方々への意識調査

を通じて、茨木市の商業発展、安心・安全なまちづくりに資する基礎資料の作成を目的としている。具体的には、2023年7月29日（土）、30日（日）に開催された「第49回 茨木フェスティバル」に茨木商工会議所 商業部会と共同して出展し、市民に向けた「茨木の交通と暮らし」と題したアンケート調査を行い、集計と分析をすることで、茨木市の商業発展、安心・安全なまちづくりに資する基礎資料の作成を試みた（アンケートの実施に関しては、昨年と同様に、新型コロナウイルス拡大に十分配慮し、電子的な形で実施したことを申し添える）。

なお、本年度については特に2023年11月26日（日）に開館した茨木市文化・子育て複合施設「おにクル」（本アンケートの実施は開館前）に関する質問項目を含め調査を行っている。「おにクル」の周知度、施設利用意向、イベント開催に関する希望意向の3問である。この分析結果は、茨木市にも提供している。

### アンケート当日の実施状況

茨木フェスティバルに茨木商工会議所 商業部会と共同で2日間ブースを出展し、そこで茨木市民アンケートに取り組んだ（写真1）。商工会議所 商業部会運営委員 田峰氏と宮崎の監督のもと、追手門学院大学の学生プロジェクト「ほくせつ探検大学」の学生が3シフトでそれぞれ10名程度が参加し、アンケートを実施した。アンケートの回答を増やすために、協力していただいた方々にお菓子すくいをしてもらった（写真2）。学生は、列の整理とアンケート回答のサポート、お菓子すくいに役割を分担した。





写真1



写真2

昨年度に引き続きアンケートの回答にはGoogleフォームを活用した。事前に商工会議所の中野氏を交えアンケート項目を整理し、Googleフォームを使って回答フォームを作成した。GoogleフォームへのリンクをQRコードにして印刷し、参加者のスマートフォンなどで読み取ってもらい回答してもらった(写真3)。また、スマートフォンを持っていない子どもや、操作に

慣れていないことが想定される高齢者の方を念頭に、タブレットを3台準備し、学生がサポートして入力するようにした(写真4)。

結果的に、多くの参加者に協力していただくことができ、2日間で1,000件を目標にしていたが、両日とも18時30分頃には目標を達成し、合計で1,111件の回答が集まった。



写真3



写真4

## 1. 回答者の基本属性

アンケートの回収は1,111件、無効回答数としたものは0件であった。すべての回答者がアンケートに協力的であったこと、アンケート回答者のサポートをしてくれた追手門学院大学の学生たちの力添えによるところが大きい(なお、昨年は1,125件の総数に対し無効回答が14件であった)。有効回答数は昨年と今年と同数のため、以降の記述では昨年と今年のアンケート結

果(回答数)をそのまま比較する部分があるが、それは母数が同数(1,111件)で問題が生じないためである。

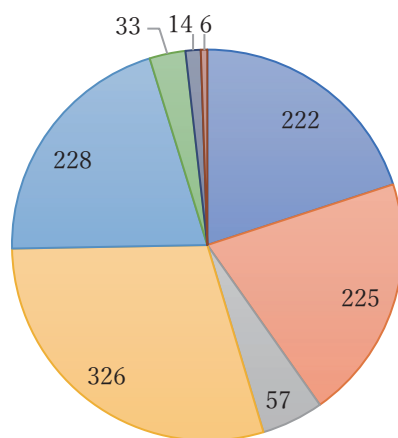
### 1-1. 年齢分布

アンケート回答者の年齢は30歳台が最も多く326人で全体の29.3%であった。次いで多いのが40歳台で228人(20.5%)、以下は10歳台の225人(20.3%)、9歳以下の222人(20.0%)と続いた(図1-1.1参照)。



図1-1.2のようにアンケート回答者の年齢分布傾向は昨年と同様であるが、40歳台と30歳台が減少し、10歳台と9歳以下が増加している。当然ながらこの一年で人口構成に大きな変化は起きておらず、何らかの要因があると考えられる。可能性の一つとしては、昨年までは新型コロナウイルスへの感染対策として外出を控える割合が本年よりも多いことが挙げられる。特に親が子供を人の集まるイベントに連れてくることを控え

たことが考えられる。そして、今年から親が子どもを連れての参加が増加し、10歳台と9歳以下の増加がみられたのではないだろうか。そのほかの可能性としては、アンケート（茨木フェスティバル）の実施期間中に子どもが多く参加する他のイベント等があり減少したということも考えられる。ただし、期間中に特に大きな子ども向けイベントが実施されたということは確認できなかった。



■ 9歳以下 ■ 10歳台 ■ 20歳台 ■ 30歳台 ■ 40歳台 ■ 50歳台 ■ 60歳台 ■ 70歳以上

図1-1.1 アンケート回答者の年齢 (N=1111)

出典：アンケート結果より筆者作成。

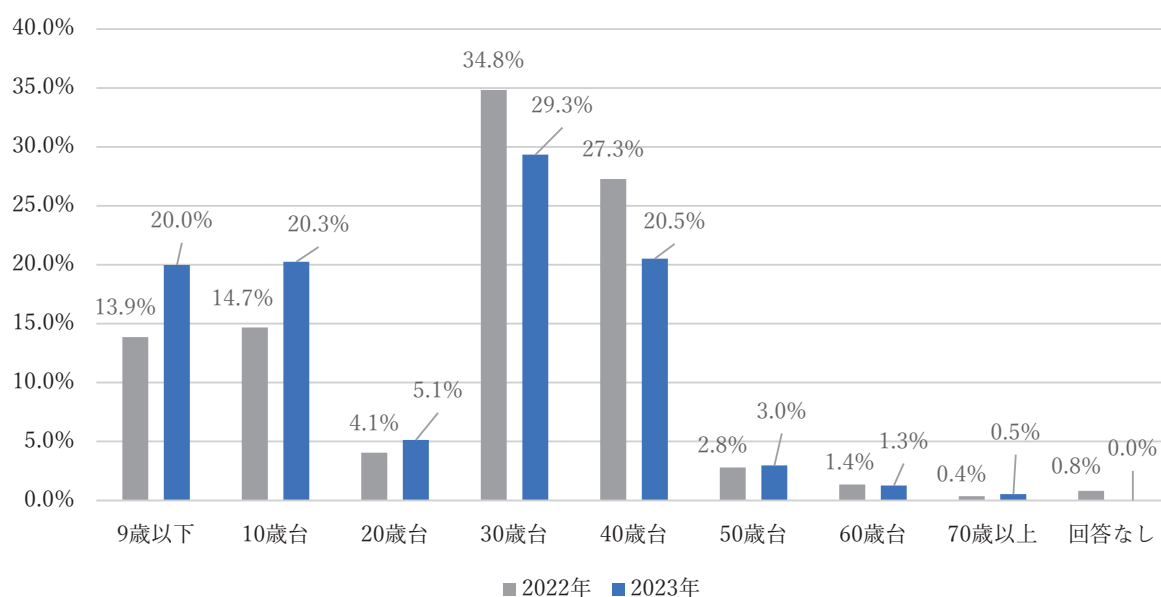


図1-1.2 アンケート回答者の年齢 (昨年との比較)

出典：アンケート結果より筆者作成。

## 1-2. 性別分布

性別は女性が63.4%、男性は35.0%と女性の割合が高かった（表1参照）。なお、この傾向は昨年アンケート結果と同様である。図1-2.1では女性と男性のそれぞれの年齢比率を出しているが、男女ともに40歳台、30歳台、10歳台、9歳以下がその他の年齢層よりも多くなっていることがわかる。図1-2.2は茨木市の人口統計をアンケートの年齢の選択肢と同じ分け方で男女それぞれの比率を出したものである。図1-2.1と図1-2.2を比較するとわかるようにアンケートの回答者（茨木フェスティバルの来場者）は特定の年齢層に

偏っている。基本属性以外の質問項目では年齢層ごとに結果を出すなどして様々な年齢層での回答を確認できるようにするが、全体としては特定の年齢層の回答が大きく反映されている結果であることは先に述べておく。

表1 アンケート回答者の男女比 (人)

女	男	回答しない
704	389	18
63.4%	35.0%	1.6%

出典：アンケート結果より筆者作成。

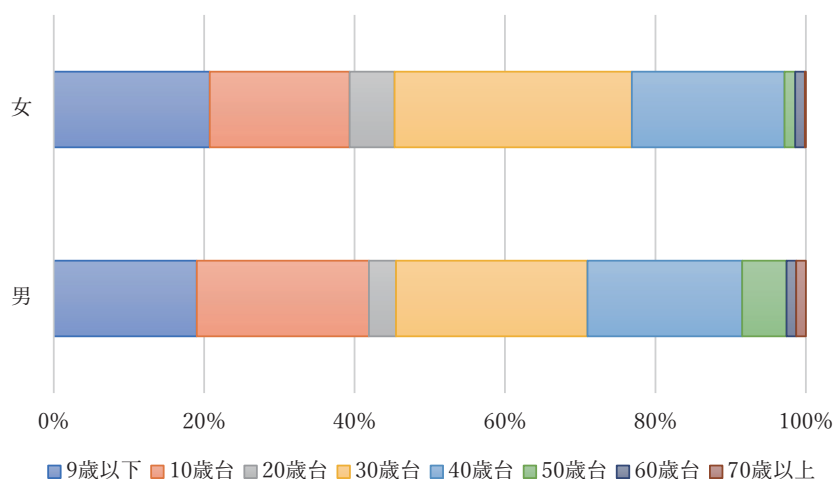


図1-2.1 アンケート回答者の男女別年代構成

出典：アンケート結果より筆者作成。

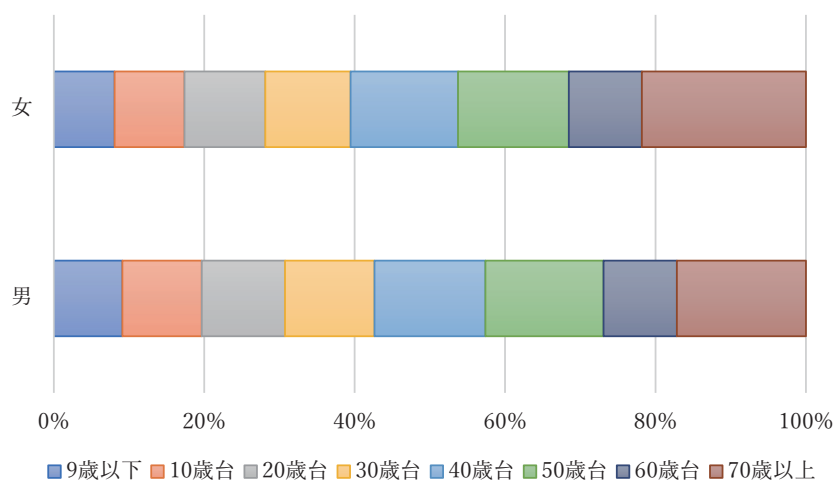


図1-2.2 茨木市の男女別年代構成

出典：茨木市「1歳階級別人口（住民基本台帳）」より筆者作成。

表2 男女別年代構成比較 (2023年と2022年の比較)

(人)

		9歳以下	10歳台	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台	70歳以上	回答なし
2023年	女性	146 20.7%	131 18.6%	42 6.0%	222 31.5%	143 20.3%	10 1.4%	9 1.3%	1 0.1%	0 0.0%
	男性	74 19.0%	89 22.9%	14 3.6%	99 25.4%	80 20.6%	23 5.9%	5 1.3%	5 1.3%	0 0.0%
2022年	女性	92 13.3%	99 14.3%	38 5.5%	256 36.9%	174 25.1%	14 2.0%	14 2.0%	3 0.4%	3 0.4%
	男性	60 15.3%	60 15.3%	5 1.3%	123 31.3%	124 31.6%	16 4.1%	1 0.3%	1 0.3%	3 0.8%

出典：アンケート結果より筆者作成。

### 1-3. 居住地分布

回答者の居住地は茨木市が78.0%、市外が20.9%であった。昨年は不明（郵便番号が正しく入力されていないなど）または回答なしが12.0%と割合が高かったが、今年は1.1%と昨年に比べかなり正確な居住地を判断できる結果となっている。なお、居住地の回答項目は基本として郵便番号での回答をお願いしているが、郵便番号が正確に思い出せない等も考慮し、郵便番号が不明な場合は市区町村および町字名を記入してもらっていた。回答の中には市町村名のみの記載もあり、茨木市に居住していることが判断できるものの、地域まで把握できたものは78.0%のなかの87.9%であった（表3参照）。

次に茨木市と回答した中でもさらに地域を中央部、北部、西部、東部、南部と分けた地域分布は図1-3の結果となっている。この地域分けは昨年のアンケート分析と同様に「茨木市産業情報サイト（茨木市産

業環境部商工労政課）『あい・きゃっち』（<https://www.i-catch.city.ibaraki.osaka.jp/about/36.html>）の地域分けを採用している（表4参照）。

そして、茨木市以外の居住地は回答数の多い順から、高槻市、吹田市、大阪市、箕面市、摂津市、豊中市、島本町、尼崎市、以上が5人以上の回答があった市町村となっている。昨年は市外が195人で5人以上の回答があった市町村は6市であったため、今年は昨年に比べて他地域からの来場者が多い結果となった（表5参照）。

表3 アンケート回答者の居住地

(人)

茨木市	市外	不明/回答なし
867	232	12
78.0%	20.9%	1.1%

出典：アンケート結果より筆者作成。

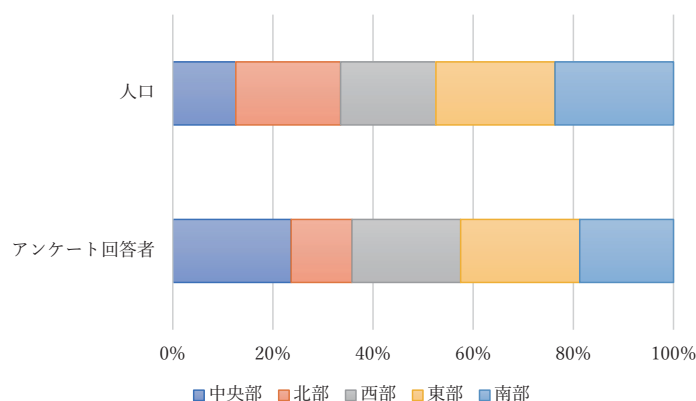


図1-3 茨木市在住者の居住地

出典：アンケート結果より筆者作成。

表4 茨木市の地域分け

地域	町字
中央部	岩倉町、永代町、駅前、大手町、小川町、春日、片桐町、上中条、下中条町、新庄町、新中条町、末広町、西駅前町、西中条町、東中条町、双葉町、舟木町、別院町、本町、宮元町、元町
北部	安威、粟生岩阪、泉原、五日市、五日市緑町、上野町、大岩、太田、太田東芝町、上音羽、上郡、清阪、車作、桑原、彩都あかね、彩都あさぎ、彩都やまぶき、佐保、清水、下井町、下音羽、宿久庄、生保、城の前町、銭原、千提寺、大門寺、高田町、十日市町、豊原町、中河原町、長谷、西安威西太田町、西河原北町、西福井、忍頂寺、花園、東安威、東太田、東福井、福井、藤の里、南安威、南耳原、耳原、室山、安元、山手台、山手台新町、山手台東町
西部	井口台、上穂積、上穂東町、北春日丘、郡、郡山、道祖本、紫明園、下穂積、宿川原町、新郡山、豊川、中穂積、西田中町、西豊川町、西穂積町、畑田町、穂積台、松ヶ本町、松下町、見付山、南春日丘、南清水町、美穂ヶ丘
東部	鮎川、主原町、五十鈴町、稲葉町、大池、大住町、学園町、学園南町、上泉町、桑田町、庄、白川、新堂、総持寺、総持寺駅前町、総持寺台、園田町、大同町、竹橋町、田中町、寺田町、東宮町、戸伏町、中総持寺町、中津町、中村町、西河原、橋の内、星見町、三咲町、三島丘、三島町
南部	丑寅、宇野辺、蔵垣内、小柳町、沢良宜西、沢良宜浜、沢良宜東町、島、新和町、大正町、高浜町、玉櫛、玉島、玉島台、玉瀬町、玉水町、天王、並木町、奈良町、野々宮、東宇野辺町、東奈良、東野々宮町、平田、平田台、真砂、真砂玉島台、美沢町、水尾、南目垣、宮島、目垣、横江、若草町、若園町

出典：茨木市産業情報サイト『あい・きゃっち』の地域分けより一部未記載の地域を加え筆者作成。

表5 市外在住者の居住地

(人)

高槻市	吹田市	大阪市	箕面市	摂津市	豊中市	島本町	尼崎市	その他 (4人以下)
53	47	30	24	15	11	6	5	41
22.8%	20.3%	12.9%	10.3%	6.5%	4.7%	2.6%	2.2%	17.7%

出典：アンケート結果より筆者作成。

2. 【質問1】あなたが普段よく利用する鉄道(モノレールを含む)の最寄り駅はどこですか？(複数回答可)

最寄り駅についての質問では、JR茨木駅を選択した人

が最も多く、回答数が493で全体の44.4%を占めた。それに次ぐのが阪急茨木市駅で、回答数が304の27.4%であった。以下は、JR総持寺駅、阪急南茨木駅、阪急総持寺駅、大阪モノレール南茨木駅というように続いて

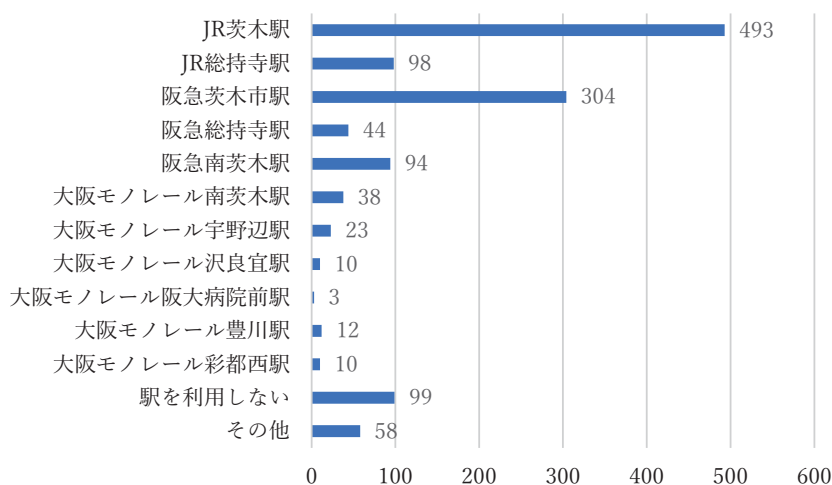


図2 アンケート回答者の最寄り駅

出典：アンケート結果より筆者作成。

いる（図2参照）。昨年からの変化として言及しなければならない点は、阪急茨木市駅の回答数が昨年の回答数239から今年は304と27%増加していること、大阪モノレール 南茨木駅に至っては昨年の18から今年は38と111%も増加している。回答数が少なく変動が大きく見えやすいもののここまでの増加は注目したい点である。なお、昨年と今年の茨木市の人口に大きな変化が出ている地域はない。

その他、本アンケートで注目したのは、最寄り駅を複数選択した人の割合である。表6のように最寄り駅を2つ以上選択している人は145人で全体の13.0%であった。茨木市は市内に11の駅があり、JR、阪急、大阪モノレールと3つの鉄道路線がある。目的地によって利用する駅を変えている人が一定数存在していることがこの回答からわかる。

表6 一人当たりの最寄り駅選択数  
(人)

最寄り駅選択数	回答者数
1	863
2	121
3	18
4	6

出典：アンケート結果より筆者作成。

### 3. 【質問2】最寄り駅を利用する目的は何ですか？（複数回答可）

最寄り駅を利用する目的は通勤・通学が最も多く411の37.0%であった。次いで市外への移動が315の28.4%、市内の移動が261の23.5%、駅を利用しないが159の14.3%と続く（図3-1参照）。今年のアンケートで追加した「市内の移動」という項目であるが、回答が多く項目を設置する意味があった。前節で述べたよう

に茨木市には11もの駅があり、自家用車やタクシーといった移動手段を使用しなくとも鉄道路線を使用して多くの場所に移動することが可能である。また、駅周辺には人通りができるため様々な施設・店舗が立地し目的地となりやすい。そのため、市内も電車・モノレールを使用して移動する人が一定数存在すると考えたからである。

その他、ここでは「駅を利用しない」という回答が

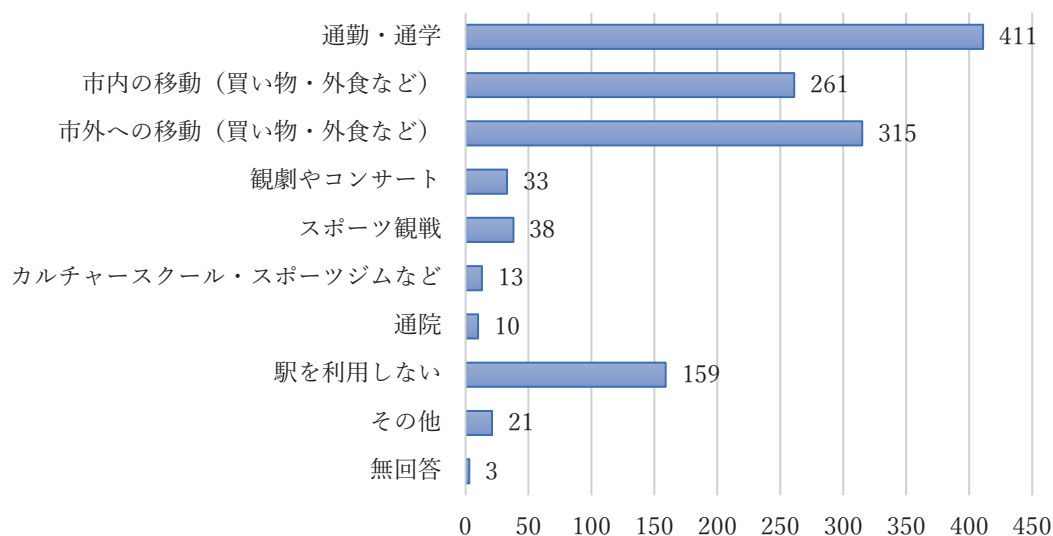


図3-1 最寄り駅の利用目的

出典：アンケート結果より筆者作成。



多かった点も触れておかなければならない。注目すべきは【質問1】で「駅を利用しない」と回答した数よりも【質問2】で回答した数が増えている点である。【質問1】では最寄り駅を尋ねる質問で選択肢の上位に駅名が並ぶため、普段駅を利用しない人も自宅の近くにある駅を選択したのではないかと考えられる。そして、

【質問2】では自宅の近くに駅があっても駅を利用していない人々が加わったことで62.3%も増加したと推測できる。参考に【質問1】と【質問2】で「駅を利用しない」と回答した人を居住地域別に割合で表した図を載せておく（図3-2参照）。

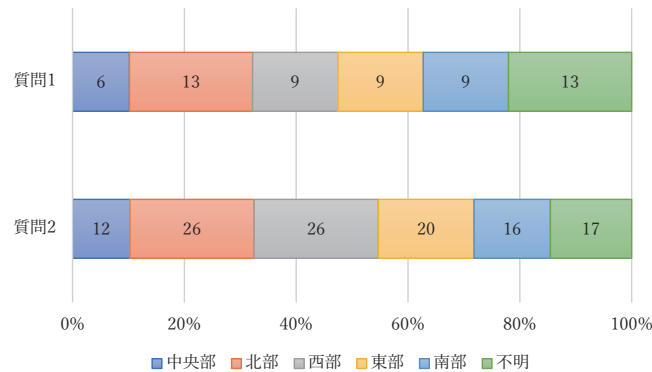


図3-2 「駅を利用しない」と回答した人の地域(【質問1】と【質問2】の比較)

出典：アンケート結果より筆者作成。

4. 【質問3】よく利用する駅周辺に不足していると思う施設・お店は何ですか？（複数回答可）  
駅周辺に不足していると思う施設・お店の質問では、

「駐車・駐輪場」が最も多く309(27.8%)の回答があった。それ以降は「カフェ・レストラン」が257(23.1%)、「スーパー」が235(21.2%)、「コンビニ」が196(17.6%)、「菓子・

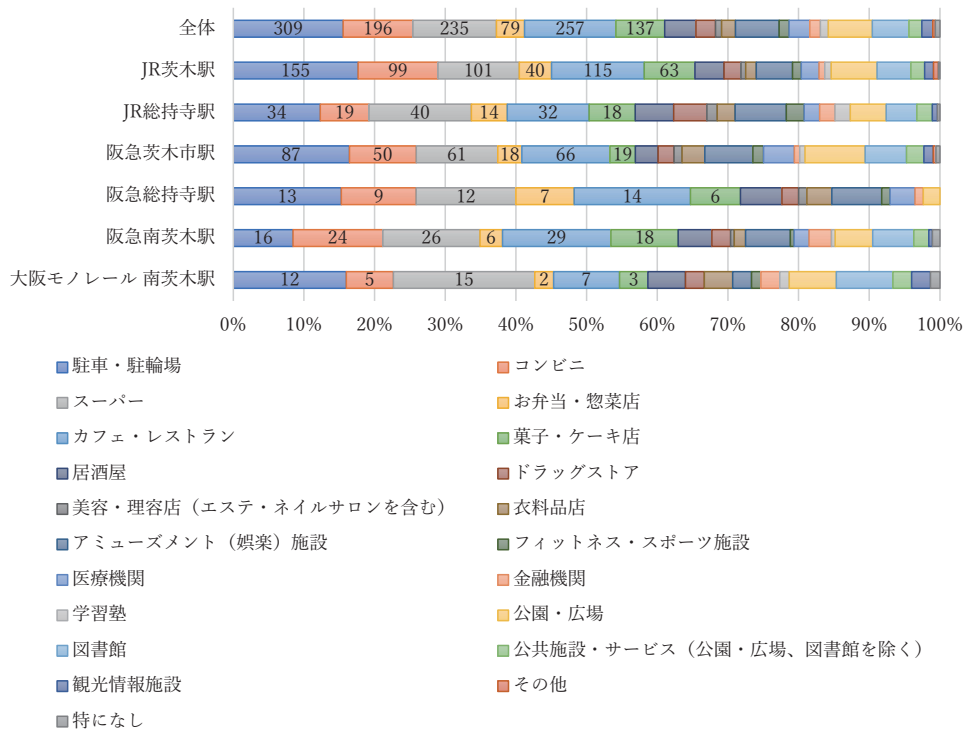


図4 駅ごとに不足している施設・お店の回答割合

出典：アンケート結果より筆者作成。

ケーキ店」が137 (12.3%)、「公園・広場」が124 (11.2%)、「アミューズメント (娯楽) 施設」が123 (11.1%) と並ぶ。回答が全体の10%以上であったものは以上の項目である (図4参照)。この質問項目については駅ごとにもその割合を出しているが、多くの駅で「駐車・駐輪場」が不足しているという回答となっている。特にJR茨木

駅、阪急茨木市駅という地価が高く広く駐車・駐輪場を確保することが難しいと思われる場所での回答が目立っている。

その他、駅ごとに回答の傾向をわかりやすくするため、各駅の回答を5位まででまとめている表7を参考にしていきたい。

表7 駅ごとに不足している施設・お店の回答上位5項目

	1位	2位	3位	4位	5位
JR茨木駅	駐車・駐輪場	カフェ・レストラン	スーパー	コンビニ	菓子・ケーキ店
JR総持寺駅	スーパー	駐車・駐輪場	カフェ・レストラン	アミューズメント (娯楽) 施設	コンビニ
阪急茨木市駅	駐車・駐輪場	カフェ・レストラン	スーパー	コンビニ	公園・広場
阪急総持寺駅	カフェ・レストラン	駐車・駐輪場	スーパー	コンビニ	お弁当・惣菜店
阪急南茨木駅	カフェ・レストラン	スーパー	コンビニ	菓子・ケーキ店	駐車・駐輪場
大阪モノレール南茨木駅	スーパー	駐車・駐輪場	カフェ・レストラン	図書館	コンビニ

出典：アンケート結果より筆者作成。

## 5. 【質問4】茨木市内での移動に利用・使用する交通手段を教えてください。(複数回答可)

茨木市内の交通手段の質問では、自転車を選択する人が最も多く606 (54.5%) であった。以下、自家用車

が390 (35.1%)、徒歩が253 (22.8%)、バスが204 (18.4%) と続く。昨年と今年を比較すると図5-1のように、バスの利用がやや増加している以外は大きな変化がないことがわかる。なお、今年のアンケートでは茨木市

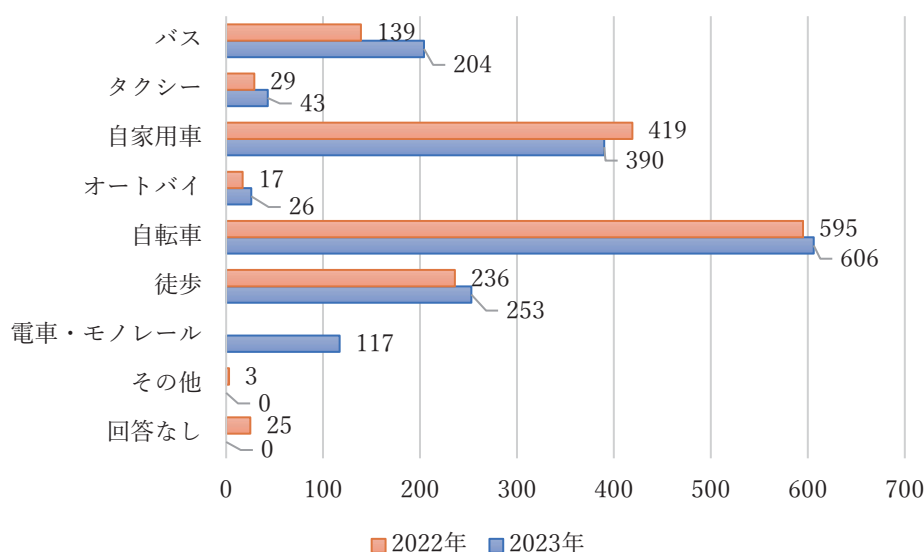


図5-1 アンケート回答者の移動手段 (2023年と2022年の比較)

出典：アンケート結果より筆者作成。

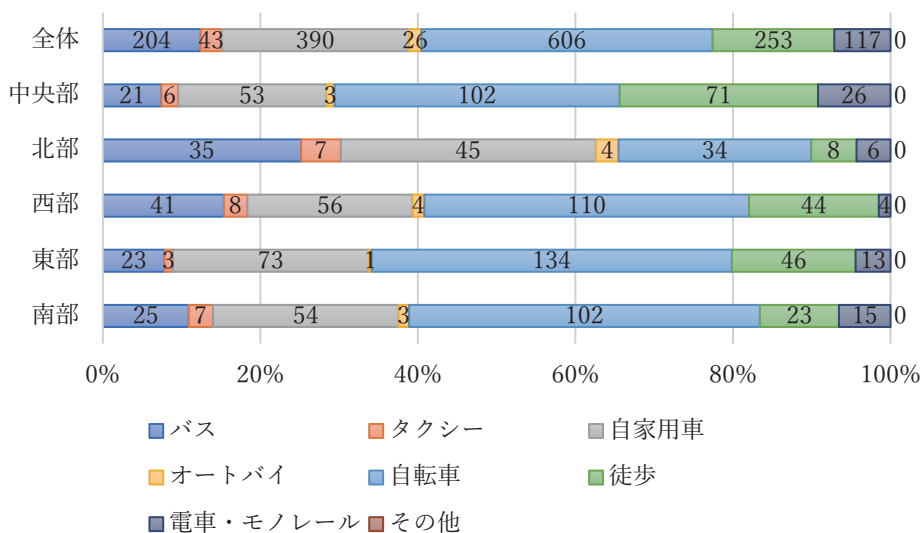


図5-2 地域ごとの移動手段

出典：アンケート結果より筆者作成。

内での交通手段に「電車・モノレール」の選択肢を追加した。先述しているように（3.【質問2】）市内も電車・モノレールを使用して移動する人がいると考えたからである。この回答数は117（10.5%）となっており、先の内容を裏付ける結果となっている。

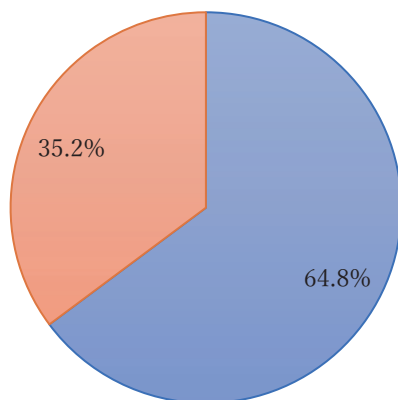
そして、茨木市内の地域ごとの結果では図5-2のようにそれぞれの地域で結果が大きく異なっている。今回注目するのは北部地域のバスと自家用車についてである。近年、人口が減少する地域のバス路線の廃止や減便、高齢者の運転が社会問題として取り上げられることが増加している。北部地域は茨木市のHPにも「市街地よりも顕著な少子高齢化と人口減少」と書かれている状況の地域であり、どちらの問題にも該当するため、解決するための対策を進めていかなければならない部分といえる。

**6.【質問5】今年の11月16日にオープンする「おにクル」をご存じですか？ご存じの場合は何で知りましたか？（複数回答可）**

「おにクル」の知名度についての質問では、「知っている」と回答した人が多く、全体の64.8%（回答数：720）であった。「知らない」の回答は35.2%（回答数：391）である（図6-1参照）。この結果を茨木市在住

者と茨木市以外の在住者で分けて出したのが図6-2である。茨木市だけに限定すると「知っている」は73.4%にも割合が増加する。また、市外在住者も33.2%の人が「知っている」と回答していることから「おにクル」が広く注目されている存在であると言えよう。

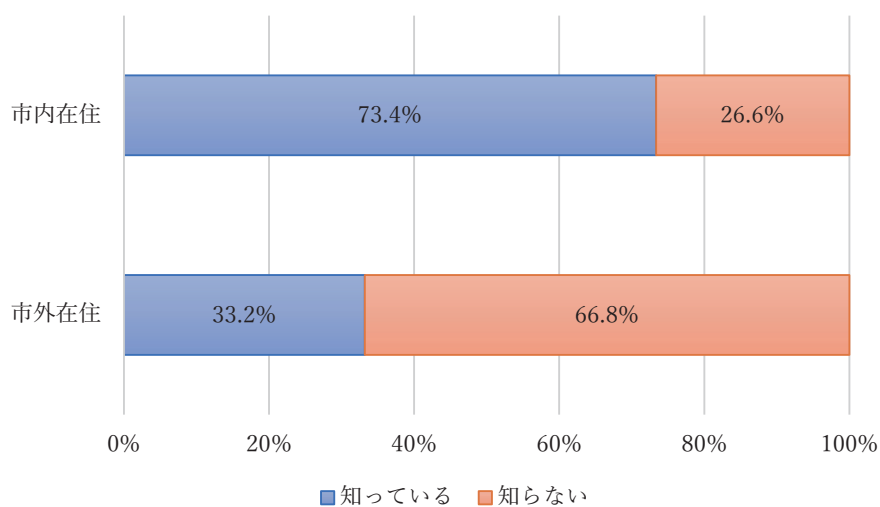
そして、表8を見ていただきたい。この質問項目では知名度を確認することに加え、「知っている」という回答には、合わせて「おにクル」を知るに至った情報経路を確認している。その結果は、「いばらき広報で知った」と回答した人が最も多く531（73.8%）であった。次いで多かったのは「家族・知人などから聞いた」で105（14.6%）といばらき広報との差が非常に大きい結果となった。また、情報経路として注目すべき点は図6-3で確認できるように、市外在住者も経路として「いばらき広報」を選択する人が多く、市外で「知っている」と回答した人のうち42.9%が「いばらき広報」を通じて「おにクル」の存在を知ったのである。市広報誌の影響力の高さを表す結果と言えるであろう。そして、表9もその影響力が確認できる資料である。「いばらき広報で知った」と回答した人の割合が30歳台以上から高くなっているが、9歳以下も30歳台の回答割合に近い74.5%という結果になっていることは非常に興味深い。



■ 知っている ■ 知らない

図6-1 「おにクル」の知名度

出典：アンケート結果より筆者作成。



■ 知っている ■ 知らない

図6-2 「おにクル」の知名度（市内在住者と市外在住者の比較）

出典：アンケート結果より筆者作成。

表8 「おにクル」を知った情報経路

(人)

いばらき広報 で知った	家族や知人な どから聞いた	茨木市のホーム ページやSNS などで知った	茨木市以外の SNSで知った	工事現場の表 示で知った	茨木市役所で 知った	テレビ・新聞・ ラジオで知っ た	その他の経路
531	105	69	17	51	29	10	24
73.8%	14.6%	9.6%	2.4%	7.1%	4.0%	1.4%	3.3%

出典：アンケート結果より筆者作成。

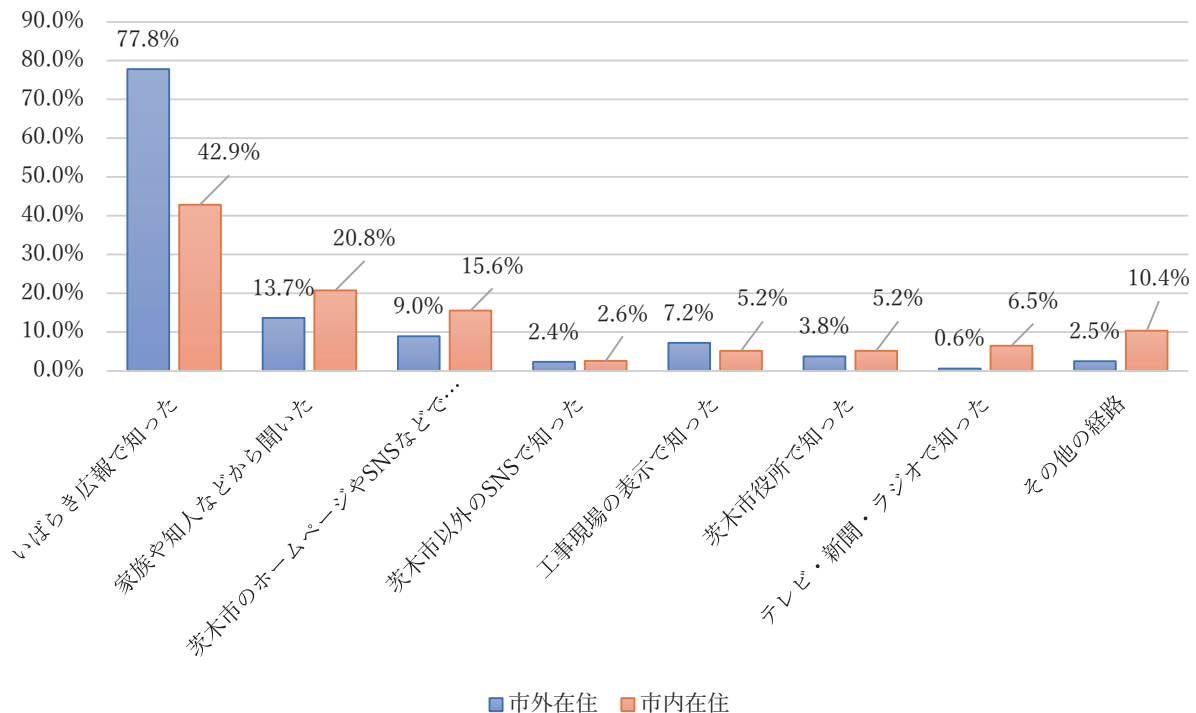


図6-3 「おにクル」を知った情報経路 (市内在住者と市外在住者の比較)

出典：アンケート結果より筆者作成。

表9 年代ごとの「おにクル」の知名度と「いばらき広報」で知った割合

(人)

		9歳以下	10歳台	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台	70歳以上
知っている	回答数	153	104	31	221	172	21	13	5
	割合 (%)	68.9%	46.2%	54.4%	67.8%	75.4%	63.6%	92.9%	83.3%
いばらき広報で知った	回答数	114	51	20	168	143	18	13	4
	割合 (%)	74.5%	49.0%	64.5%	76.0%	83.1%	85.7%	100.0%	80.0%

出典：アンケート結果より筆者作成。

7. 【質問6】「おにクル」には以下のような施設や機能があります。利用したいと考えていますか。利用したい施設や機能を教えてください。(複数回答可)

「おにクル」の施設や機能で利用したいものを尋ねる質問では、「プラネタリウム」と回答した人が最も多く659(59.3%)であった。以下、「図書館」が586(52.7%)、「屋内子ども広場」が277(24.9%)、「カフェ」が237(21.3%)と続く。ここまでの回答が全体の20%以上の人が選択した項目である(図7-1参照)。また、この質問項目

では年齢別でも割合を図7-1に出しているが、年齢によって回答がやや多い部分はあるものの(例えば30歳台の「子ども支援センター」など)、全体の回答の傾向と大きな変化は見られなかった。この質問で注目したい点は最寄り駅の質問でも見られた複数回答者の数である。図7-2で確認できるように、2つ以上選択した人は半数を超え、3つ以上の選択した人も3割を超えている。「おにクル」への関心の高さとともに、「おにクル」の様々な施設・機能には市民の求めるものが多く含まれていることを表す結果と言える。



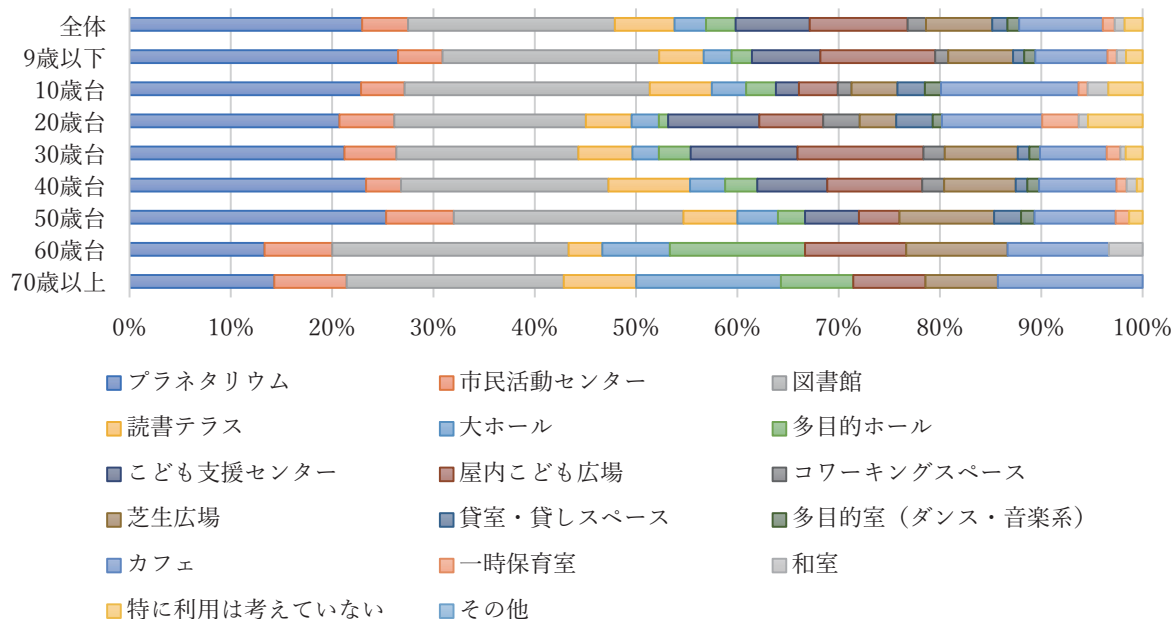


図7-1 「おにクル」で利用したい施設・機能

出典：アンケート結果より筆者作成。

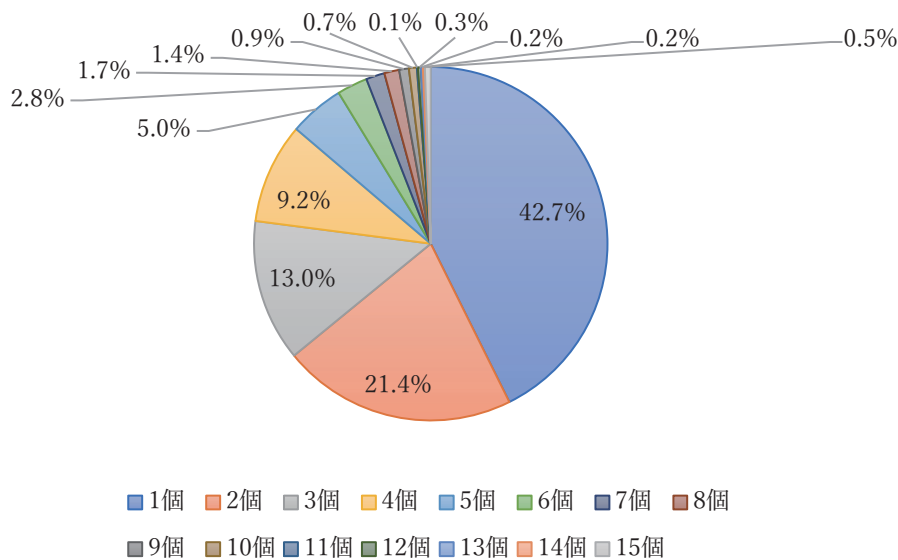


図7-2 【質問6】の回答で1人が選択した施設・機能の数

出典：アンケート結果より筆者作成。

8. 【質問7】「おにクル」の大ホール（1,200名収容）  
にどんなイベントを期待しますか？（複数回答可）

「おにクル」の大ホールで期待しているイベントを聞く質問では、「ミュージカル」を選択した人が最も多かった。ただ、「クラシックコンサート」、「ポップスコンサート」、「演劇」なども回答数が多く、様々なジャンルのイベントが期待されているという結果になった。また、複数選択をした人の割合も特に目立っ

た結果にはなっていない。この項目で着目した点としては「その他」として子供向けのイベントを望む声が複数上がっていたところである。大ホールは選択項目で挙げられているイベントの種類からもわかるように文化的イベントが主として実施される予定かもしれない。しかし、「おにクル」は文化・子育て複合施設である。親子が対象のものや、親子で楽しめるイベントやコンサートの需要も一定数あるように思われる。

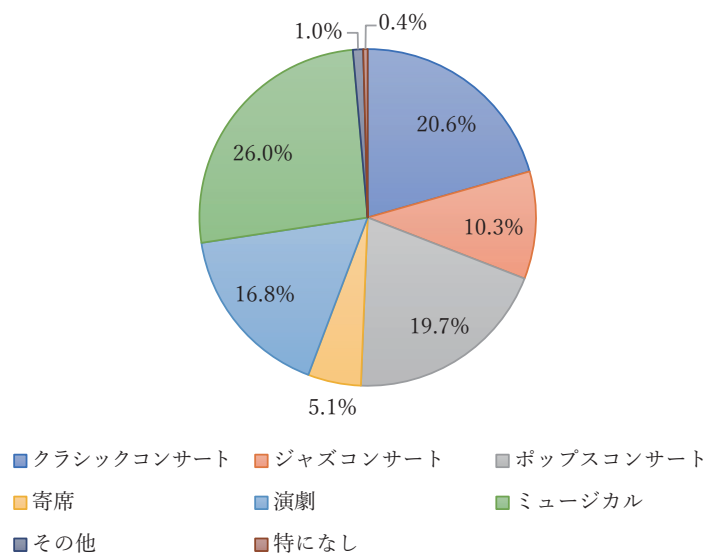


図8-1 「おにクル」の大ホールで期待するイベント

出典：アンケート結果より筆者作成。

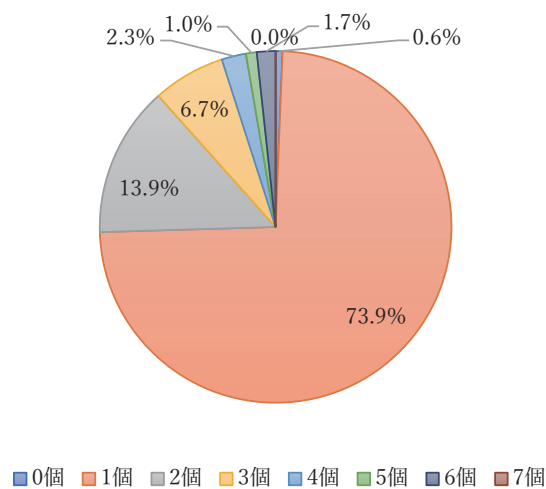


図8-2 【質問7】の回答で1人が選択した施設・機能の数

出典：アンケート結果より筆者作成。

## 9. 【質問8】 その他「茨木の交通と暮らし」について ご意見があればご記入ください。

「いばらきの交通と暮らし」についての意見に記入があった件数は84で全体の7.6%であった（図9-1参照）。意見の内容は、好意的なもの、批判的なもの、要望、意見はないが記入があったもの（特になし）、記入はあ

るもの内容のないもの、の5つに分類することができるため、「好意的」、「批判的」、「要望」、「特になし」、「除外」として図9-2のように集計した。「特になし」以外では「要望」が多く29.8%、次いで「批判的」な意見が14.3%であった。内容では「要望」と「批判的」で交通に関連するものが37件中27件と多くを占めた。

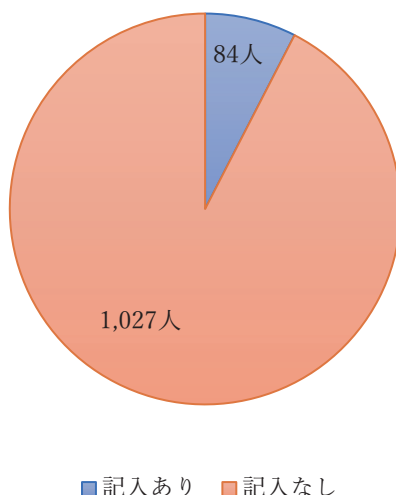


図9-1 【質問8】 意見の回答者数

出典：アンケート結果より筆者作成。

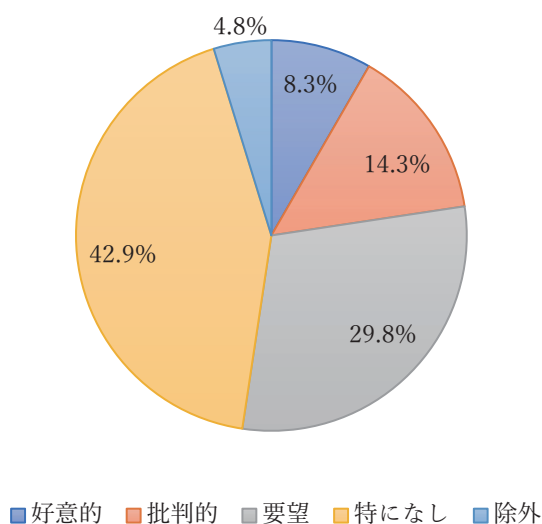


図9-2 【質問8】 意見の分類

出典：アンケート結果より筆者作成。

### おわりに

本年度は2023年11月茨木市に新たにオープンした文化・子育て複合施設の「おにクル」に関する質問が軸となるアンケートであった。文化・子育てに関する市民のニーズや施設に関する期待の大きさがわかった結果になったが、この点については後述し、まずはアンケート回答者の基本情報および継続的に調査をしている交通と暮らしに関する内容から述べていく。

基本情報としては10歳台と9歳以下の回答者が増えたことで若年者の情報が十分に得られる状態になったことは大きな点と言える。2023年5月8日より新型コロナウイルス感染症が「5類感染症」と感染症の位置づけが引き下げられたことで、特に子どもがイベント等の人が集まる場所に出かけられる状況になってきたことと関連性があるように思われる。そして、交通と暮らしに関する部分では、これまで駅を中心とした人の動きや駅周辺の商業環境を中心にアンケートの項目が作られてきたが、今回は駅を利用しない人の把握をする項目を設けたことで、駅を利用しやすい環境であっても、どの程度の割合でその他の交通手段を選択するのかが把握することができた。また、真逆の内容であるが市内に多くの駅が存在することで市内の移動

にも電車・モノレールを利用する市民の行動が見られた。今後のアンケートではこの二点についてさらに深掘することを考えていきたい。

そして、「おにクル」に関連した質問では、新しい施設に関する関心の高さが表れていた。また、「おにクル」は文化・子育てに重点を置いた施設であるが、施設・機能として多くの人々から求められる内容であることも分かった。文化面の取り組みは、高齢者や社会人の学びや子どもの教養を育む機会として有効なことであろう。市民の生涯学習の場として「おにクル」が様々な人に活用されることが期待される。また、子育ての取り組みは、子育て世代の住民を支える施設として期待させるとともに、居住地を検討する新婚・子育て世代の関心にもつながり、「おにクル」の存在は良い材料になると考えられる。

最後に、【質問5】で分かった「おにクル」を知るに至った情報経路で明らかになった「いばらき広報」の情報発信力の高さに再度言及しておきたい。多くの人々に情報を伝達できる媒体として市広報誌は十二分に機能している。今後も市民に有益となる様々な情報を「いばらき広報」で発信していただきたい。

『追手門学院大学ベンチャービジネス・レビュー』特別号

---

編集・発行 2024年1月31日 発行  
発行所 追手門学院大学ベンチャービジネス研究所  
〒567-8502 茨木市西安威2丁目1番15号  
【TEL】072-641-7374 【FAX】072-643-9597  
【E-mail】ventureb@otemon.ac.jp  
【URL】<http://www.otemon.ac.jp/research/labo/venture/>  
編集者 村上 喜郁  
印刷所 友野印刷株式会社  
〒700-0035 岡山市北区高柳西町1-23  
【TEL】086-255-1101

---







# VENTURE BUSINESS REVIEW

Special Issue  
January 2024

Otemon Gakuin University



Institute of Venture Business Research, Otemon Gakuin University  
2-1-15, Nishi-Ai, Ibaraki, Osaka, Japan